

はじめに

2000年に東京油問屋市場の百周年記念として編纂した「東京油問屋史 油商のルーツを訪ねる」は、油の歴史を商人の歩みを通してまとめた類書のない本である。しかし発行からすでに16年経ち、新たな研究書も数多く出版されていることなどから、追補版をまとめることとなった。今回の追補版では、前書でやや不足していた江戸十組問屋の盛衰、関東地廻り油の動向などについての記述を盛り込み、灯りの視点からまとめてみた。

江戸時代以前の灯明油は、主に寺や神社で使用されることが多く、山崎八幡宮の市場独占が長く続いたとはいえ、大山崎の販売量はそれほど多くはなかったと思われる。庶民の段階まで灯りが浸透するのは江戸時代からで、さらに細かくいえば江戸での灯明油消費が急増するのは元禄時代からだと推定される。上方の灘目（現在の兵庫県）などに菜種や菜種油の買い占めを禁じるお触書が出されるのは、元禄期（1688～1707年）以降であり、上方における菜種の生産に関する資料も17世紀のものはほとんど残されていない。

元禄時代は上方中心に井原西鶴の浮世草子や近松門左衛門の上方歌舞伎、尾形乾山による陶芸など数多くの文化が開花したが、江戸においても松尾芭蕉による俳句、菱川師宣による浮世絵、竹本義太夫などが登場し、新しい文化が庶民に浸透し、出版産業が急成長した。

こうしたバブルにも見える元禄文化が開花した背景には、幕府による通貨改鑄によって生み出された莫大な富、貨幣流通量の増加によるインフレがあった。

そして出版文化の成長は、庶民の家にも行灯の普及を促す一因になった。長屋の片隅で、暗い行灯の灯を頼りに本を読み絵を楽しむ職人や、内職の縫い物に没頭する内儀さんの姿も見られるようになった。

行灯に使用されたのは菜種油と綿実油、それに魚油。菜種油と綿実油は主に大坂など上方から運ばれる高級品で、銚子で獲れるイワシの油などを使用した庶民も多かった。菜種油の価格は1合41匁、一晩で半合の油が必要とされ、1合の油はほぼ2晩で消費される。イワシの油は1合13～14匁で推移しており、価格は安いものの照度は低く、臭いも強いという欠点があった。また蠟燭は大きな百匁タイプが約200匁で売られ、一般庶民には手が出なかった。

100万都市に成長し、庶民にまで普及した江戸における灯火油需要は年間10万樽（約8万トン）を超えるまでになったが、その大部分を上方からの菱垣廻船に頼っており、不安定な供給体制は、海難や買い占め等により度々“油切れ”を起こした。

幕府がまず力を入れたのが、関東における油脂原料、特に菜種の増産である。幕府は何度も触書で菜種増産を訴えているが、実現はできなかった。概して、冬播き菜種は、関東以北での栽培には適していなかった。冬に播種され晩春に収穫される菜種は、雪の積る地方では栽培そのものが困難だった。また米との2毛作であり、農民にとっては大きな負担になることも、隘路となった。

このため関東地廻りの灯明油は水油（菜種油）や白油（綿実油）の比率が50%強程度（上方から江戸に移送されてくる灯明油は98%が水油と白油）と低く、荏油、胡麻油、桐油などが半分近くを占めていた。こうした色油に分類される油脂類は、照度も低く、桐油などは乾性油で減りも早かった。結局のところ関東地廻り油は価格が高く、品質も劣るという状況を脱しきれず、江戸時代の最後まで、“下り物”の牙城を崩せなかった。

幕府の灯明油政策は、上方依存からの脱却を目指す一方、安定供給、価格安定のために上方に頼らざるをえないという現実と向き合うしか手がなかった。明和期（1764～）には、大坂の独占を強化することで、油の安定供給を図ろうと、明和の仕方と呼ばれる、総合的な灯油対策を打ち出すに至る。この大坂偏重の政策は、周辺菜種生産農家の反発を招き、また西日本各地では法令に反する搾油施設の稼働が相次いだ。

大坂京口問屋の進言を受け入れたといわれる明和の仕方は、ほどなく綻びを見せ始め、寛政3（1791）年には、灘目、兵庫の搾油業者の菜種買い取りを緩和し、江戸への直積みも認めるに至った。

そして文政9（1826）年には江戸で大騒動となった油切れが起こることとなり、幕府は上方に支配勘定役を派遣し詳細な聞き取り調査を行い、その報告を受けて天保3（1832）年に新たな油方仕法を定めるに至る。この時に、「江戸にては霊岸島に油寄所を新設し、江戸着の油はすべて同所にて油問屋ならびに問屋並仕入方のものに売り渡すこと」（「江戸と大坂」幸田成友）とされた。しかし、幕府の肝入でスタートした霊岸島の油寄所は5年後に廃止される。官製の油統制は成功しなかった。

幕府のあらゆる灯明油政策は、江戸における供給と価格の安定を図ることを目的に企図されたものだが、いずれも成功したとはいえない。その理由としては、生産を上方に依存するという供給システムを変えられなかったこと、流通を菱垣廻船という不安定な海運に頼らざるを得なかったこと、そして十組問屋という流通を支配した問屋仲間の独占を認めるに至ったことなどが挙げられる。

しかし逆から見ると、上方における灯明油生産体制の整備、江戸・大坂間を結んだ大動脈の菱垣廻船の運行、そして灯明油の物流・商流を支えた江戸の油問屋は、曲がりなりにも江戸100万都市の灯りを支えたのである。その功績は大なるものがあったといえよう。